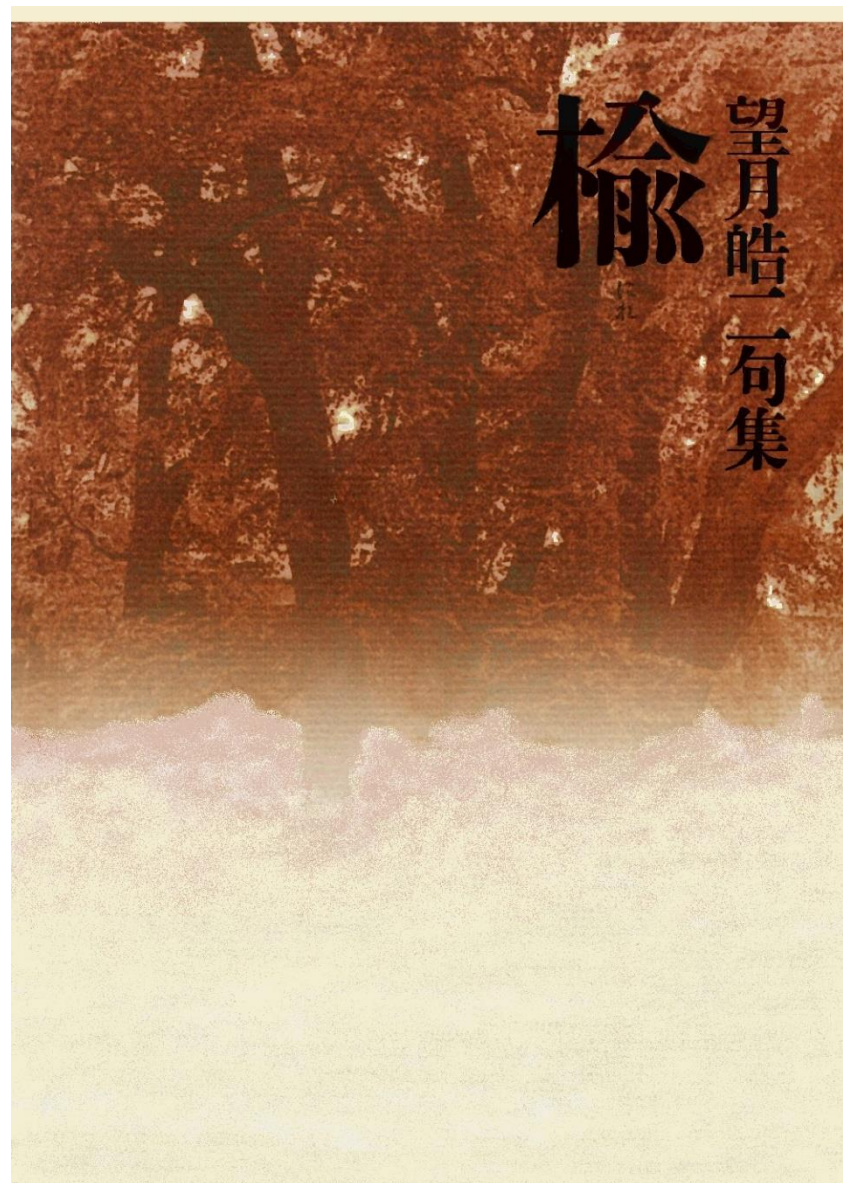
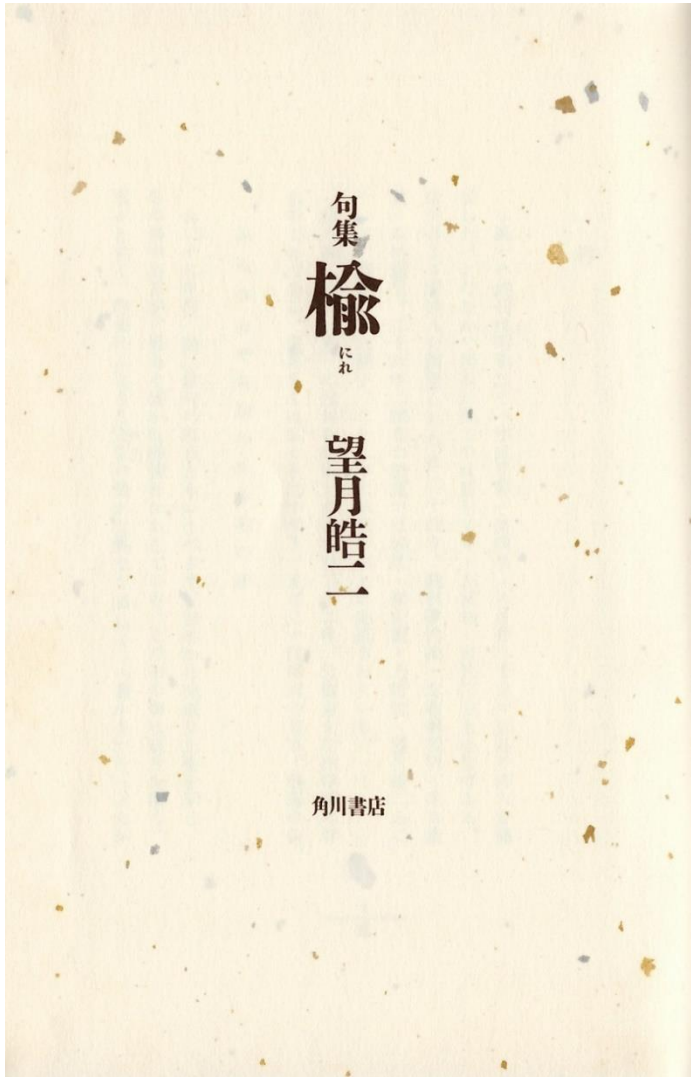


句集
楡
にれ
望月皓二





目次

序	沢木欣一
春田	昭和二十二～三十年
合歓の花	昭和四十七～五十一年
花野	昭和五十二～五十六年
雪片	昭和五十七～六十一年
紋白蝶	昭和六十二～平成三年
年新た	平成四～七年
葦の花	平成八～十年
跋	林徹
あとがき	

序

「風」の創刊は昭和二十一年五月号。第四号（八月号）で三十五名の同人を発表した。このなかで現在に残るのは原子公平・志城柏・市川汀三と小生である。投句者より新同人を推薦したのは二十四年、瀧沢伊代次・北市都黄男・川口重美・木村雅男。二十六年二回目の推薦では柏禎・飴山實・上野燎・望月皓二ら二十一名。同年、中山純子、二十八年に林徹が同人に推薦されている。

望月皓二氏が「風」に投句を始めたのは昭和二十二年、北海道大学医学部の学生のところである。望月さんは私より二つ年下、まだ二十代半ばの若さ。巻頭の句、

ふるさとや冬雨つたふ柿の幹

は二十二年作、皓二俳句の原点ともいうべきで、初めから完成した姿を示し、冬の雨であるが、明るく暖かな詩情をたたえている。この柿の幹は歳月を経て、堂々と太く、作者のふるさと安芸の豊かな風土を表わす。「豊かさ」と「大らかさ」、それに「やさしさ」を皓二俳句の特色として挙げたい。

愛誦したい句が多いが、そのなかから若干を選べば、

朝日先づ山にあたりぬ冬の街
地を這ひて朝顔ひらく母の家
土を掘り土がつめたし蟬時雨
蟹の子の畳を歩く晩夏かな
撫でてみる頭のぬくき鹿の子かな
福寿草洞がふくれて花開く
魚島へはためきあへり大漁旗
小春日や重なりあひて大なまこ
鉄塊が毛ものの如く雪の上
管絃祭漁師の喧嘩始まりぬ

いずれの句も簡潔的確で写生の要諦を決めている。第一句の冬の街は作者の住むふるさとの小盆地であろう。母の家の句、「地を這（ふ）」朝顔の花が母そのものである。われわれの世代の母の普遍的な在り方を想う。蟬時雨の句、作者の鋭敏な感覚が働いている。作者は「蟹の子」や「鹿の子」や「なまこ」など小さな生物にやさしく暖かい目を注いでいる。

福寿草の句は誰でも多く作っているが、「洞がふくれて」が面白い。ここにも作者の医学者のぬくとい情がこもっている。「大なまこ」など気味悪いものだが、この句では好ましい存在として魅力を発する。鉄塊の作の比喻は秀抜、異物への変身が飛躍的で面白い。

「魚島」は瀬戸内海の鞆の浦で名高い。この句は角川の『合本俳句歳時記(第三版)』に例句として出ている。鯛がひしめき合って海面が盛り上る。私も同行させてもらった。管絃祭のときにも一緒であった。この祭を見て、私の病気は吹きとび、回復に向かった。

五十年にわたる俳句を通しての交友を貴重なものに思い、感謝するとともに望月さんの御息災を祈り、ますます大らかな俳句を作られるように希望します。

平成十年十月二十三日

沢木欣一

春 田 昭和二十二年〜三十年

ふるさとや冬雨つたふ柿の幹
眼つむれば瞼はふるふ寒夕焼
歳晩や地の轟きを聞きて臥す
雪降るや病舎の果に鶏ねむる
玄関から塵掃き出して凍る家
雪嶺や飯に日当り昼餉とす
療養所裏より段々春田かな
水仙の茎のぬくきを患者より
秋風の家には吾立ち妻坐せる

合歡の花

昭和四十七年〜五十一年

昭和四十七年

筍や童子の如く朝日中
桜咲き重油が海へ流れ出づ
合歡の花懇ろに手を洗ひをり
捨て臼の濡れて卯の花腐かな
鮎の宿煙出しより夕げむり
杉山の影及びゐし紫蘇畑
百日紅牛の鼻づら引かれゆく
舗装路を濡らし渡りぬ田植人
街道の厩の匂ふ朝曇
山茶花やパン載せて来る乳母車
麦播きの透けて明るし松林

朝日先ず山にあたりぬ冬の街
旗振つて機関車が来る歳の暮

昭和四十八年

龍の髭元日の雨少し降る

雪やみし底の青藻を覗きをり

冬の松切り倒されて大いなる

夕桜あつけなき死を診て帰る

正面の金魚の顔や妻の留守

桐の花大河へ窓開け放つ

杉山の奥より来たり夏の蝶

虫時雨眼鏡をかけて眠りをり

朝凧や穂草に乗つて雀たち

杉垣の外のせせらぎ夜の秋

秋簾潮のひかりの来てゐたり

秋簾島の花嫁通りけり
穴を掘り秋日の影を濃くしたり
母が家の畳にこぼす草虱
小春日の餅つく音や崖の上
水際まで乳牛が来て春立ちぬ
丸顔の乙女出て来る梅林
花菜雨釘箱の錆指につく
青梅雨や患者ふどしを軒に干す
霧深き幹に繋がれ牛の貌
当直医かなぶんぶんをつまみ捨つ
妻が家に白桃を食べ疲れをり
合歡の花舳先をあつめ舟つなぐ
茂吉歌碑朝霧の草伏しゐたり

昭和四十九年

牛小屋の門の艶昼の虫
療院の午後あたたかき草紅葉
日あたれば穂絮飛び立つ古墳かな
昭和五十年
白鳥の胸漣に向きなほる

檜の木の水に映りて春隣
川音の中や一人の朝田植
金堂の甍を濡らす青葉月

霊山の青葉月夜となりけり
星合の真下にねむる瀬の島
大年の藁屋を抱きて杉木立
昭和五十一年
仙の影失ひて海荒るる

牛小屋に牛覚めてをり節分会
初蝶や釘箱さらし釘を選る

看護婦に憂きことありやおじぎ草
母が家を去る山梔子の香をまとひ
蛍火の風にのりたる迅さかな
鶉篝の草を照らして遡る
地を這ひて朝顔ひらく母の家
沖に出て頭の地肌まで日焼け
山陰へ帰る夜汽車の冬帽子

花野

昭和五十二年〜五十六年

昭和五十二年

水底に日の当りゐる春隣
星空に煙をあげて雛の宿
蘂やしばらく夕日とどまれる
鳥帰る駐在巡查玻璃みがき
初蝶や剥がれて匂ふ杉丸太
近づけば藤の紫うすれたる
岩の面水がすべりて春の蟬
早苗饗の庭先の牛鳴きにけり
雨乞ひに曳かれて来たる牛の貌
水軍の墓の頭に蟬の殻
浅野川その水上の秋灯

秋声の碑の前ひかる蜘蛛の糸

松の根に權ねかされて鰯雲

昭和五十三年

枯草に風の音あり海苔干場

石垣の穴にすみれや海士の村

梨の花峽に冷たき雨降れり

竹の秋轟きて貨車過ぎにけり

風吹けば萤火ともる檜の梢

病院に今日また死あり大旱

羽根透きし蝸鳴くを見て病みぬ

牡蠣打ちに沖の島山日が当る

昭和五十四年

中庭に日が降りそそぐ寒造

天守にて春の夕日に染まりたる

ろくろ場の大きな靴の春の泥

庭先に火が燃えてをり雛の宵
種を播く川面のひかり顔にうけ
高きより花びら散れり峡の町
街道をつむじ走れり麦の秋
輝きて雲が通りぬ竹の秋
青なつめ浅き流れをころがれる
みどり児の大きあくびや稲の花
猫の子が鳴いて出て来る花野かな
帰り花けんけんとびの髪をどる
銀杏の実落ちて匂へり茂吉歌碑
弁当を枕の土工法師蟬
柳川
石段の水に沈めり秋桜
上ノ山 茂吉記念館
番傘も遺品の一つ菊日和

冬の旅比良の入日に目を覚す

昭和五十五年

春の鶉集まつて来て枝ゆする

五月雨の音の中なる身を拭ふ

葬の後植田に雨の水輪ふゆ

腕組をして青年の昼寝かな

田の草を道にうちあげ小昼かな

紙燃やす小さき炎や法師蟬

海原に雲せり上る田植かな

鯖鮎をもらひぬ雨の降りつづき

雪吊りの上を鳥の啼き帰る

草叢に夕日の落ちる冬至かな

昭和五十六年

縄跳びの地を叩く音寒の入り

墓の面野火の炎を映したる

海に出て吹かる伊良湖の春の鳶
鵜の山や春の入日の大いなる
鵜の山へ鵜の列帰る野火の上
老鶯や丸太に乗つて鑿使ふ
土を掘り土がつめたし蟬時雨
川がまづしらみて来たり月見草
薔薇園に緑の蜘蛛の生まれたる
唾蟬のぶつかり止まる天守閣
踏切りも秋茄子畑も夕日濃し
おのづから流れとなりぬ冬泉
飴売りの紺の手甲や酉の市
空に向き牛が鳴きたり敗荷

雪片

昭和五十七年〜六十一年

昭和五十七年

花蜜柑水汲み水をこぼしゆく

牡丹の花の重さや病母の辺

門前の植田一枚瑠璃光寺

宙吊りのみどりの毛虫浄瑠璃寺

秋立つや母のゆあみの湯を流し

突堤を鳥の歩く朝曇

蟹の子の畳を歩く晩夏かな

冬至湯に沈みてをれば牛の声

昭和五十八年

初東風やいよいよ黒きほとこの神

吹き荒れて空真青に春の富士

雨のつぶ額にあたり苗木市

病室より虫を放つ老婆かな
大小の瀬波すぎゆき盂蘭盆会
山に日が満ちて一人の墓参かな
母が家の青山椒に朝の雨
忿怒仏牛にまたがり青田波
回診や樹々に音して秋の雨
羽根立てて石を擱むや秋の蝶
枯蓮田流れの筋のみゆるなり
松原に夕日あたれり年の暮
若菜野の川に鷗ののぼりをり
鋼材を抛る地響枇杷の花
撫でてみる頭のぬくき鹿の子かな
見張鶉の身震ひしたり春の雨

昭和五十九年

保育所にオルガン鳴つて耕せり
桃の花畝あたらしく切られたる
朝日先ず泰山木の花に射す
蓮開く真上の雲の朝焼けて
早稲の香につつまれて灯をともしけり
谷の風少しつめたし青なつめ
真黒の仔牛生れぬ松の内
心臓をいたはり歩み花茶垣
笹鳴や藪をくぐりて川岐れ
松が枝の影が障子に雛の宿
看護学生卒業
乙女らの歌声とどく春の鴨
初蝶や渚づたひの翅づかひ
はくれんに夕冷の空高きかな

昭和六十年

雀の子屋根をころげて能舞台
白木蓮に新しき雲流れ来る
どの田にも漣たてり夕つばめ
五月雨や母のベッドの裾にねて
母の死へたまさか鳴けり雨蛙
母を焼くけむりが昇る麦の秋
朴若葉透く日がとどく骨納め
土くれも空も乾けりじやがの花
林徹氏句碑
鏡なす句碑の面や夏の海
一面に野づらは青し額の花
いつまでも西日映せり施餓鬼側
すれちがふ潮の匂ひの秋遍路
串鮎を夕日の顔が横くはへ

川舟の舳引き入れ石落の花

昭和六十一年

雪片のしばらくとまる破魔矢かな

松籟の松葉散らせり鋤始

元日の日向にいでて歩みけり

日溜りに牛曳きだして松の内

酒蔵の上に星でて春立ちぬ

夜桜の下の流れのゆるやかに

乳色の雨霧つつむ田植かな

ほととぎす帽子をとりて歩むとき

舟端を叩く波音早星

盃蘭盆の夕日はながく海にあり

板の間に昼寝の海女や盃蘭盆会

穂に乗って頭かがやく稻雀

杉山の裾にしぶけり崩築
色鳥や桧原の上に白き富士
雪を着てひかり放てり富士の瘤
酒米を搗く音ひびく刈田かな
石に座し運動会を見てをりぬ

紋白蝶

昭和六十二年〜平成三年

昭和六十二年

万葉の歌碑に風花ふれて消ゆ
牛小屋に紋白蝶の生れけり
女子寮に喇の音や朝桜
豆の芽の畦土を割る十文字
朝より空がにごれりほととぎす
白桃を豊に並べ灯をともす
威銃面に響き茂吉歌碑
雨後の樹の雫にうたれ盆踊
胡弓の音涼風流れはじめけり
時忠の墓へ稻田の鉄気水
上時国家
みのり田の色の映りし障子かな

角切りの終り幔幕はためけり
冠の小菊の白き舞樂かな
牡蠣打ちの庭に干涸び大ひとで
破蓮田鉄路を隔て海荒るる
山茶花や鉄扉の外を川流れ
枇杷の花根元に灰を捨てに出昭和六十三年
尉鷓ひかりのなかを飛び移る
ばさと立つ花の中より大鳥
傘飛ばしたり足摺の春疾風
一湾に白波走り春彼岸
まむし草舌を垂らせり関所跡
黒羽や蛙が鳴ける桑畑
濤の穂にぶつかつて海猫舞ひあがる

郭公や平首なげて馬寝まる
青畳匂ひて土用波見ゆる
朝顔に鱗飛ばせり魚売り
大石を鎖で縛り下り築
いぼむしり水の迅さに身構へぬ
豆稻架にみどり残れり飛弾の奥
獅子頭古りて鉄色冬迎ふ
ゆりかもめ潜水艦の胴にそひ
群鹿のどどと走れり初詣
平成元年
花吹雪放てる一樹崖の上
黒き棒爛漫の花支へたる
牡丹寺うすき煙ののぼりけり
金色の大き仏や牡丹寺

天辺の朴の花より崩れそむ

北海道日高

花独活や海より烏啼きもどる

潮垂らす黒装束の昆布採り

うに採りの舟に身を伏せ漂へり

大白鳥水玉が背をすべり落つ

檻の鷺冬青草をついばめり

平成二年

福寿草洞がふくれて花開く

山口県八代

田鶴啼いて桃の木峠晴れわたる

纜の石蓐したたる達磨船

菰卷の棍棒となり傾ぎあふ

菜の花の流れて来たる砂鉄採り

雨の粒玻璃を走るや朝桜

流鏝馬の馬の足踏み花の屑

魚島へはためきあへり大漁旗

源平の戦の海へ虫送り

拵げ干す秣匂へり青棗

三角の遊女の墓や鶉の声

妻籠

馬宿へこごみて入りぬ菊日和

諏訪大社

初紅葉縄のとぐるの鎮座せり

地を打って大きな音の朴落葉

平成三年

小春日や重なりあひて大なまこ

藤棚の青竹ぬるる春の雨

天辺に鶉の来てゐる朝桜

楠青葉こども相撲に女の子

伊予内子

遠雷や蠟をころがす掌

蠟蔵の屋根がしぶきて驟雨来る

白蓮朝の厨に灯がともり
音楽が厩舎に流れ秋の潮
友禪を流す下手にゆりかもめ
雨宝院炬燵にとどく川明り
金沢美術館
初冬の羽根のみどりや雉香炉

年新た

平成四年～七年

饅頭のへそに胡桃や年新た

平成四年

福寿草芽吹き土くれこぼれけり

矮鶏あそぶ下萌の地に塔の影

尾道

志賀旧居文机春の海へ向く

車座になりて天城の雉食へり

被爆樹のごつごつの枝鳥雲に

花辛夷はなびらごとそよぎたる

北大恵迪寮跡 二句

大ぶりのたんぽぽばかり咲きそろふ

芽吹かむとして楡の影大いなる

雀の子線路の石にまぎれけり

木琴が鳴り学校に燕の子

麦の穂の流れて鷺の佇めり
紫陽花の毬ごとに濃し月の影
疲れ鶉の尻より籠に納めらる
鶉篝の鉄籠の朝の草の中

奈良の墨買ふとかなかな一つ澄む

東大寺法華堂

かなかなや夕日の栄の仏たち

牛小屋に鉄の翼の扇風機

足摺岬

磯畑へ椿の黒実はじけとぶ

四万十川の川上まぶし秋の蟬

ででむし句碑

初雪が山に来てゐる綾子句碑

蚕の宮の鈴紐赤く冬に入る

達身寺前の刈田を雉走る

柚子照るや目鼻もわかぬ仏達

着膨れて牛の鼻息浴びにけり

酒蔵に鶏頭の影人の影

高階に友を訪ひたる冬至かな

芭蕉終焉の地

文字わかぬ碑面を拭ふ師走かな

盛塩に朝日当たれり寒造

平成五年

草に落ち吉書の炎上りけり

着膨れて鶴見の衆へ加はれり

霜晴や田鶴啼く方へ手をかざし

牡丹の芽に雪片のふれて消ゆ

加太

灯台の空がまぶしき雛流し

捨雛を燃やし荒磯の石焦がす

蓬餅加太の入江に潮満ちて

水搔きを張つて鶉が立つ花の昼

旅鞆鵜塚に置けり花の昼
春日入り鵜小屋に垂らす荒無筵
雉啼くと砲台山に登りけり
顔洗ふ青梅沈む朝の川
秋篠寺
青梅に風吹き起り女身仏
秋篠の水田に浮けり竹落葉
老鶯や暗峠米を搗く
夕映の消えたる石に蛇の衣
村をさの先づ潮浴びて島祭
神輿舁く顔が波間に浮き沈み
増田昌恵逝去
なきがらやにいにい蟬の鳴きだせり
菓子食つて友悼みをり夏の果
病む馬に裏窓高し秋の蟬

馬具棚に一升壇のまむし酒
くわりんの実朝日二階の畳にも
梅檀の実の下に来て暖かし
甘樫の丘に時雨の眼鏡拭く
白きもの高干す初瀬柿日和
幾筋も煙のぼれり雁の空
雁渡る洛東江の末ひかり
大袋頭に載せて小春婆
黒煙ソウルあげて場末の大焚火
大寒の藻屑貼りつく雁木平成六年かな
草萌ゆる田へ干し並べ甑布
小学校のプール湛へて鴨引けり
啓蟄の鶏屋に貝殻叩きをり

ひめゆりの塔

壕に降る真赤な春の落葉かな

春時雨たてがみ深き宮古馬

雉啼くや向ひの島へ船出づる

近江路や右も左も行々子

ほととぎす西瓜の花が一つ咲き

松下村塾

松蔭の虫食ひの杵梅雨の蝶

船底に寝て黒南風の海渡る

獅子独活の花に顔寄せ見島牛

大根が辛しと雨を乞ひゐたり

津和野 鷺舞

炎帝へ諸羽ひろげて鷺の舞

近江番場 蓮華寺

日盛の大石にして茂吉歌碑

琴糸の鬱金に染まる酷暑かな

炎昼や生糸の束に銀の艶

近江 石道寺

草刈り鎌 観音堂に忘れゐる
野辺送り日向は稲架の匂ひけり
樹の上に小熊のゐたる栗拾ひ
鼻太き飛鳥大仏柿日和
犬眠りゐる自然薯の筈を守り
色鳥や軒に小ぶりの鞠子富士
新しいものに赤きを盛りて飛鳥仏
延命の水 飲み雪の峠越ゆ
出雲横田 たたら製鉄
鉾滓搔けば火の粉湧き立つ雪の暮
堅雪へ火だるまの鉾滓抛りだす
火の雫垂らす鉄塊雪の暁
鉄塊が毛ものの如く雪の上
日向高千穂
夜神楽の神ら舞ひ来る畦の道

夜神楽の神々迎へ大焚火
牛小屋の隅に仔牛や神楽笛
夜神楽や神まぐはへば大笑ひ
連翹や田の隅々へ水走る
啓蟄や火が燃えてゐる畑の隅
腹這ひて豊冷たし初蛙
ほととぎす朝の目薬眼にあふれ
残る鴨あひるの列の後につき
松籟の止みたる空や残り鴨
地に降りて子燕羽根を引き摺れり
野生馬のあご髭吹かれ海霞
若駒もころげ遊ぶや青岬
城跡は小学校や桜実

実桜の大手門より登校す

巖島神社管弦祭

姫神の御座船月の海渡る

廻廊に海女の仮寝や夏の月

管弦祭漁師の喧嘩始まりぬ

往還の背戸より見ゆる晩夏かな

蟪蛄の子が硝子戸を滑り落つ

秋雨や二重瞼の鹿寄り来

柁舟秋の高波かぶりけり

散りかかる紅葉一枚鹿食へり

口能登 妙成寺

青蛙純子の句碑に登りゐる

初鴨の水かがやかす浅野川

秋冷の四高の廊下踏めば鳴る

宿坊の厨灯を消し十三夜

宮崎県椎葉村 二句

焼酒の霧吹き浄め里神楽

雪蛭谷へ顔出す小屋の牛

凍鶴のまはりの草の吹かれをり

翔けりつつ白鳥声をしぼりけり

巖島神社鎮火祭

大年の闇を火が駆け鹿が駆け

街中に鹿眠りゐて年暮るる

菫の花

平成八年〜十年

初漁の銀のさよりを干し連ね

平成八年

紙屑の燃えて走れる彼岸かな

引出しは薬ばかりや木の芽雨

涅槃会の雨にあひたるみみずかな

木の芽山はんざき泡をひとつ吐く

日おもてに片栗の花山の墓

高倉の脚にすがれり蟬の殻

朴の花二上山に日は高し

越前高岡

病む牛に谷をへだてて春の蟬

正座して眼鏡拭へり稲の花

秋風に頭の熱き仔牛かな

裏窓に馬が顔出し枯れ深し

大年の潮澄むところ神の鹿

平成九年

目尻より涙ひとすぢ寝正月

海柘榴市や冬菜畑に石仏

白梅の蕾のみどり壇の浦

地獄絵は女人ばかりや地虫出づ

お遍路の鈴のぼり来る岬かな

銀行の前の朝市大なまこ

虻生れて老人の顔ひとめぐり

牛蛙浮きゐて星の映りゐる

医学書に向かへばねむしほととぎす

洗はれて肌の水玉青林檎

朝顔の鉄扉に開き誕生日

遠くにもころがつてをり落棋檀

綾子先生の御霊に額づきて

普段着の遺影日向に熟れ棗

見舞客女ばかりや鳩くぐる

平成十年

海士老いて水かげろふのゆるる顔

土くれのそれぞれに影春立ちぬ

遠くまで声の透れり花の鶉

捨白の草に沈みて花杏

地に降りて声の大きな巢立鳥

夏安居の門前の川鮠走る

秋篠や青梅濡らすほどの雨

天平の仏をめぐけ夏燕

丈高く葦の花咲く誕生日

望月皓二氏は大人である。体格もよいが、大海のように汪洋として度量のある人物という意味でこの人は全く大人である。そしてまた根はロマンストである。氏は北大医学部卒の医師であるが、広島からはるばる北大へ進んだという一事にも、以上のような氏の気質は端的に表われているように思われる。本句集の題名である「楡」にはどのような思いが託されてあるか知らないが、楡は北海道好きで、大人である氏の風貌にこよなくふさわしい。

氏が家庭の事情で大好きな北海道を去り広島へ帰って来たのは昭和三十六年のことで、その時「北海道を去る」という短い文章を連絡船の中で書き「風」に載せている。その文章の中で氏は北海道の好印象を幾つか挙げているのだが、風物としては冬のオホーツク、花は水芭蕉、鳥は郭公、食べ物はジンギスカン料理とし、人物として下宿のおばさんを挙げているのが傑作である。この人は鯨でにぎわった頃の江差の網元のオカミで、朴訥豪気、独特の浜言葉で氏はよくおこられたと書いている。好印象を持った北海道の人物としてこういう人を挙げていることに皓二氏の真骨頂があるというべ

きだろう。

北海道時代の句はこの句集に余り多くないが、北海道的な雄大な人柄を示す句は集中いたるところに見ることが出来る。

朝日先づ山にあたりぬ冬の街
雨乞ひに曳かれて来たる牛の貌
盂蘭盆の夕日はながく海にあり
ばさと立つ花の中より大鳥
夜神楽や神まぐはへば大笑ひ

対象のとらえ方がどれもこれもゆったりと大らかである。第二句などは、雨乞い神事にどこかから曳かれて来た牛を詠っているのだが、茫洋とした牛の貌に氏の心は惹かれている。

水際まで乳牛が来て春立ちぬ
早稲の香につつまれて灯をともしけり
どの田にも漣たてり夕つばめ
病む馬に裏窓高し秋の蟬

こういう抒情の勝った句もまさしく氏の一面で、ロマンチストの本領が確かな写生の技量に支えられて句の表ににじむように出てきている。

皓二氏は広島 of 東北方、向原という農村出身で、広島二中に入学するまですと田舎育ちだった

から田舎の風物・風習に大変くわしい。この草は食べられて風味のあるもの、田舎の暮しは冬になるとどう、夏にはどうといったことが一つ一つ知識ではなく、骨の髄にしみこんで分かっている。こんなふうだから氏の俳句にみられる鄙びは土性骨が入っていて、都会者が田舎へ来て詠む句とは一味違ったものがある。全体に骨太く素朴と言ったらよいか。

ふるさとや冬雨つたふ柿の幹

は眼前の柿の幹に冬雨が伝っているのだが、作者はそれと寸分違わぬ光景を幼少時に幾度となく見て来ている。

蟹の子の畳を歩く晩夏かな
真黒の仔牛生れぬ松の内
母を焼くけむりが昇る麦の秋
串鮎を夕日の顔が横くはへ

これらは別に氏の故里で詠んだものではない。しかしこういう句にある鄙びは、単なる風物にとどまっておらず、どこことなく郷愁を伴っていて、それはつまるところ田舎育ちの氏のほとんど体臭に他ならなく思われるのである。

管絃祭漁師の喧嘩始まりぬ

というのは、「雉」の十周年記念行事として巖島神社管絃祭吟行を行ったとき作られたもので、沢木先生の特選を受けた一句であるが、酒に酔って喧嘩する漁師を興ざめた目で見ている。むしろ素朴な漁師に心を動かしている。それは江差網元のオカミに魅力を感じる心と通ずるものがありはしないか。また向原の田舎で交わりを持ったであろう朴直な村人を愛する心にも通じているであろう。

遠慮深くて謙虚な氏は、作句歴が極めて長いにもかかわらず七十数歳の今日まで一冊の句集も出そうとしなかった。これは自己売込みの激しい今日の俳壇にあって極めて稀有なことと言わねばならぬ。本句集は氏が一旦自選したものを更に厳選して少なくしてほしいという氏の要望を受け、私が重ねて選したものである。収載句の裏には膨大な数の句が捨てられていることを知って頂きたい。ともあれ力量ある俳人であり、私の同行者である望月皓二氏の第一句集がここに目出たく上木される運びに至ったことは非常に嬉しい。最後に本文に触れ得なかった私の好きな句を数句挙げて筆を擱きたい。

金堂の薨を濡らす青葉月

土を掘り土がつめたし蟬時雨
羽根立てて石を擱むや秋の蝶
松が枝の影が障子に雛の宿
雪片のしばらくとまる破魔矢かな
いぼむしり水の迅さに身構へぬ
魚島へはためきあへり大漁旗
饅頭のへそに胡桃や年新た
かなかなや夕日の栄の仏たち
炎帝へ諸羽ひろげて鷺の舞
朴の花二上山に日は高し
丈高く葦の花咲く誕生日

平成十年九月九日

あとがき

私は学生時代、胸を病んで臥床を余儀なくされ、その無聊を慰めるためなんとなく俳句を始めた。どうして俳句に取りかかったのか、今考えてみても、その理由はまったくわからない。俳句は単純明快だったからだろうか。

私は俳句を始めてまもなく、俳誌「風」に投句し始めた。昭和二十二年のことであった。以来、沢木欣一先生、細見綾子先生の御指導を得て今日に至っている。しかし本業と句作が両立せず、何かと勝手な理由をつけては句作を怠け、ついに長い句作の中断に追い込まれた。沢木先生にとっては決していい弟子ではなかった。しかし先生はこの不肖の弟子を見捨てることなく、句作中断中も作句を再開するように、このころのこもったお手紙を何度となく書いて下さった。私は気持があせり、どうかしなればと思っている時、「風」同人、林徹氏に出会った。徹氏が広島鉄道病院の耳鼻科部長として赴任して来られたのであった。渡りに舟、私は徹氏にも励まされ、身边に友を得て、ようやく句作を再開することが出来た。沢木、細見両先生から再開を喜ぶところあたたまるお便りを頂き、励まして下さった。師の有難さが身にしみて感じられ

た。私がまがりなりにも作句活動を持続して今日まで来られたのは沢木欣一先生、細見綾子先生の御指導と恩情の賜である。同時に、私が兄事してやまない畏友、林徹氏のお蔭である。

句集上梓については十数年前、沢木先生からお話があったにもかかわらず、又又、お言葉にそむいて今日まで、のびのびになつてしまった。自分の俳句に対する自信のなさがなせるわざではあるが、こころの何処かに、長い句作の中断がひつかかっていたためでもあった。周囲のすすめもあり、句集上梓の決心をして、沢木先生のお許しを得た。上梓にあたっては、先生からこまごまと御教示を頂き、御多忙中にもかかわらず、句稿の御校閲を賜り、身に余る序文まで頂いた。沢木欣一先生に、そして、今は亡き細見綾子先生に更めて深くお礼を申し上げます。また畏友、林徹氏には御多忙中、選句の労を頂き、こころのこもった跋文まで頂き、御礼の言葉もない。句集上梓にあたり多くの友人、同僚の皆様に変更してその友情を謝したい。

なお、句集名「楡」は先生に決めて頂いた。私の青春は北国、楡の木蔭ではぐくまれたことに基いている。

上梓にあたって、句友、秋山美知子さん、岩崎眉

乃さん、そして角川文化振興財団の佐藤吉之輔氏、大久保直子さんに大変お世話になった。こころよりにお礼申し上げます。

平成十年十一月三日

望月皓二

著者略歴

大正一〇年八月一二日 広島県高田郡向原町に生れる

昭和二二年 「風」入会

昭和二六年 北海道大学医学部卒業

昭和二六年 「風」同人

昭和二七年 北大医学部第一内科入局

国立北海道第二療養所勤務

昭和二八年 北大結核研究所において研究に従事

昭和三六年 国立広島療養所に転勤

昭和四九年 俳人協会会員

昭和四九年 国立療養所広島病院副院長

昭和五七年 同病院院長

昭和六〇年 林徹氏主宰の俳誌「雉」に同人参加、副主宰。

昭和六三年四月 定年退職

現在、広島病院名誉院長

句集「楡」(にれ)

発行 平成十一年一月三十一日(一九九九年)

著者 望月皓二(もちづき・こうじ)

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社角川書店

ISBN 4-04-871640-9 C0092